

Joy Hendry, *The Orient Strikes Back:  
A Global View of Cultural Display*  
Berg Publishers, 2000

曾 力

本書は日本のテーマパークをグローバルな視点で考察し、日本とアジア、さらには世界のテーマパークとの違いを比較したものである。20世紀以降、観光産業は発展・成熟していくが、その中で、なぜテーマパークが次々と建設され続けているのかを問うている。本書の主要な論点は、第二章で述べられている通り、日本におけるテーマパークは単なる商業的施設ではなく、「オリエンタリズム」を逆回転させ、アジアの視点から世界を再秩序化する方法であるというものである。本書は日本を主たる調査対象とし、近年のインバウンド観光ブームに先んじて発表されている。しかし未翻訳であるばかりか日本語の書評もない。そのため本稿は改めて本書をその後の研究動向も踏まえて再考するものである。

第一章「The World of Fantasy」では、当時の日本国内の6つのテーマパークが挙げられている。北海道帯広市のドイツパーク「グリュック」、三重県志摩市の「志摩スペイン村」、北海道芦別市の「カナディアンワールド」、香川県丸亀市の「ニューレオマワールド」、新潟県の「ロシア村」、そして長崎県佐世保市の「ハウステンボス」である。これらはすべて日本で外国の景観と文化を展示するテーマパークであり、共通の特徴として展示対象を細部まで忠実に再現している点が強調されている。

第二章「Is This Reverse Orientalism?」では、テーマパークの前身である万国博覧会について論じている。初期の万国博覧会は、西洋諸国が自らの植民地成果を展示し、それを正当化する場として利用されていた。日本も初期には展示される側だったが、日本帝国の成立後は展示する側に回った。ただし、日本の成熟した模倣技術による台頭は、西洋から嘲笑を受けることもあった。

第三章「… or Disneyfication?」では、ディズニーランド誕生以降の英米のテーマパークについて紹介している。これらはディズニーモデルを踏襲してテーマを創造したが、しばしばステレオタイプのであり、正確性や歴史的文脈を欠いている。本書は日本の東京ディズニーランドを「文化的覇権の象徴」と見る従来の見解を否定し、日本人の高い自己意識によって「Domesticating Disney (飼い慣らされたディズニー)」として受容されていると論じている。

第四章「Some Other Non-Western Parks」と第五章「The World as Japan's Heritage?」では、アジアおよび欧米のテーマパークを比較している。アジアのテーマパークは文化そのものをテーマとし、遺物展示や生活再現などを通して「自己展示」を行う傾向がある。例えば、中国の「世界の窓」では少数民族文化が漢民族の視点から展示されており、その政治性は無視できない。一方、欧米のテーマパークは伝統文化よりも特定の歴史的瞬間を重視する傾向がある。たとえば、アメリカの「Colonial Williamsburg」はアメリカが独立を宣言した瞬間を再現しようとしていた。これは人々が集団としてのアイデンティティを持ち、同時に過去を美化し、特定の過去を特に重視していることを論じている。

第六章「'Real' or Replica?」では、日本における「本物」に対する態度を分析している。欧米の博物館は展示物の真正性 (Authenticity) を重視しており、通常はかなりランダムに収集された物品の集合である。物品をその製作地や使用地から切り離して展示し、その場所を代表させることが一般的だ

が、著者は製作地から離れた展示は無意味だと指摘する。日本における真正性は「実物」の場所を正確かつ正しく再現することに重点が置かれている。つまり、あまり「実物」という概念を必要とせず、「実物」の場所の正確性または正しいシミュレーションが必要とされるという。これが、なぜ多くの日本の博物館が欧米では博物館と見なされないかという理由でもある。しかし、このような「実物」にこだわらない方法は、かえって展示物をより適切な状況に配置し、「本物」としての意味を持たせることとなる。

第七章「Mimesis and Japanese Arts」と第八章「Education and Entertainment」では、模倣と教育・娯楽の関係を通してテーマパークと博物館の差異を考察する。日本人の模倣（Mimesis）への執着は茶道や禅、音楽など日常的な修行・学習の過程にも見られ、単なる劣った行為ではなく文化的熟成の基盤として理解されている。著者は欧米における模倣軽視の傾向を批判し、模倣を通じた創造性と再構築の可能性を強調し、また植民地主義において教育が博物館とどのように結びついているか、そして日本の博物館において教育がどのように娯楽と関連しているかを説明している。

著者は自ら世界各国のテーマパークや博物館を訪れ、膨大な資料を収集しつつ、模倣・表象・真正性に関する議論を展開している。日本の模倣文化を一方向的に批判してきた欧米の近代主義に対し、著者はその権威的な構造を相対化し、模倣行為を通じた文化の再生産を肯定的に評価しようとしている。

本書で紹介された事例は多岐にわたるものの、それぞれの事例が深く掘り下げられているわけではなく、一部では現地のガイドブックを使った推論も見受けられ、観光客の視点が欠けている部分もある。また20世紀末の日本でなぜこれほど多くのテーマパークが突然現れたのかという根本的な問いに対して、もっと正面から向き合い議論を重ね説明する必要があるといえよう。換言するならば、本書はテーマパークをポストモダニズム、オーセンティシティ、ミメシスと表象、再構築、巡礼、ノスタルジアなどの領域を探求する場としてとらえており、さまざまな視点から論じてはいるものの、これらを通して考察される当該社会の「まなざし」に関する議論はやはり浅薄であるという印象を免れない。

特定の施設をテーマパークとして定義するための条件は、実は流動的である。一部の場所はテーマパークという呼称を喜んで受け入れる一方で、同じような特徴を持ちながらも、このラベルを避け、「野外博物館」や「民俗村」、あるいは「民族学博物館」として認識されることを好む場も存在する [Hoffstaedter 2018 : 6048-6050]。たとえば『Theme Park Landscapes: Antecedents and Variations』で紹介されている漢民族の5つの「テーマパーク」は、「民俗文化村」と称され、これらは漢民族の視点から少数民族文化を展示することを主な特徴としている。中国社会におけるこうした特徴は、ナショナリズムの「刷り込み」ともいえる。これらに組み込まれた中国の伝統的な庭園景観への認識は、すぐに意識されるものではないにせよ、紛れもなく意図的なものである。西洋の模範と表面的に類似していても、これらの施設は高度に自意識的なナショナリズムの環境の中で運営されている [Stanley 2002 : 269-289]。

本書は2000年に出版された比較的古い研究であるが、今日的視点からも再読する意義は大きい。特に、インバウンド観光が全盛を迎える現在、日本社会において「文化をいかに見せるか」という問いが再び重要になってきている。またアジア地域、とりわけ中国社会においても、文化の継承や表現の手段としてエンターテインメント化が急速に進んでおり、コスプレ周遊観光、ドローンショー、舞台劇、屋台イベントなど、テーマパーク的構造を持つ文化実践が広く見られる。これらは「楽しみながら文化を体験する」新しい形態であり、Hendryが論じた模倣・表象・真正性の問題を再考する上で極

めて示唆的である。

#### 参考文献

Gerhard Hoffstaedter (2018) *Theme parks, anthropological study of The International Encyclopedia of Anthropology*. Wiley-Blackwell.

Nick Stanley (2002) 「Chinese theme parks and national identity」 Young, Terence G.; Riley, Robert B. *Theme park landscapes: Antecedents and variations* 269-289, Washington, DC : Dumbarton Oaks, Trustees for Harvard University.